

# 大岡昇平・初版『俘虜記』

——〈いかにして自分が捕へられたか〉を〈精密に〉語る——

谷川直美

## 序

アジア太平洋戦争末期の比島に補充兵として派遣され、米軍の俘虜となり、昭和二十年十二月に帰還した大岡昇平は、その実体験に即して『俘虜記』を著した。

『俘虜記』（初出昭和二十三年二月、昭和二十六年一月）は、一般に、『俘虜記』（創元社、昭和二十三年十二月）、『続俘虜記』（創元社、昭和二十四年十二月）、『新しき俘虜と古き俘虜』（創元社、昭和二十六年四月）の三書に収録された作品群を、改稿を施した上でまとめた、いわゆる合本『俘虜記』（創元社、昭和二十七年十二月）（以下、合本）を基礎にした連作の総称として用いられている（以下、十三篇の総称を〈『俘虜記』〉と記す）。

しかし、大岡は、生前最後に自ら編集を行った岩波書店版『大岡昇平集Ⅰ』（昭和五十八年一月）において、〈『俘虜記』〉の本文を、「西矢隊始末記」を除いて、初版（前掲三書）時の本文に戻

した。<sup>①</sup>このことから、初版を考察する意義は大きいといえる。さらに論者は、「占領下の社会の諷刺」という意図が出てくる「生きている俘虜」（初出昭和二十四年三月）<sup>②</sup>より前の段階の『俘虜記』を一つのまとまりとして考究したいと考えた。

そのため、本稿では、昭和二十三年十二月版の『俘虜記』（以下、初版）をテキストとして考究する。<sup>③</sup>この初版には、「俘虜記」（『文学界』第二卷第二号、昭和二十三年二月）、「サンホセ野戦病院」（『中央公論』第六十三年第四号、昭和二十三年四月）、「レイテの雨」（『作品』第一号、昭和二十三年八月）、「西矢隊始末記」（『芸術』第三卷第六号、昭和二十三年十二月）の四篇が収録されている。そして論者は、次の文章に注目する。

虚栄心の制約を持つ日本の俘虜は、一体いかにして自分が捕へられたかを精密には語り得ないものである。（『レイテの雨』）

大岡が「書くことで忘却しつつあった体験を再獲得してゆく（と）いうことを書く」<sup>④</sup>点については、しばしば論じられてきた。先行研究をふまえ、論者は、語り手の「私」（作中「大岡」と呼ばれる）および作者大岡が、書くことによって、（いかにして自分が捕へられたか）を（精密に）語ることを実現しようとした過程とその意味について、考究する。

さらに、「西矢隊始末記」が、『俘虜記』全体の「末尾に置いた構成から」「死んで行つた戦友たちへの限らない思い」を示す以前に、何を語るものであるのかを考察する。そして、「私」および大岡の僚友への思いを重視しつつ、「西矢隊始末記」を含む『俘虜記』の原点としての初版の意義を示したい。

## 第一章 「俘虜記」——「私」が（いかにして自分が捕へられたか）を語る——

本章では、「自殺し損つた」事情を中心に、「私」の語り方の特徴について考察する。

そもそも「私」が戦場で自殺を意図したのは、マラリヤに罹った身体で部隊から孤立し、手榴弾で「苦痛なく」死にたいと考えたためであったという。そして「私」は、「末期の水」を求めて彷徨した当省察するのだが、水を飲み次第「自殺する筈であった」こと、「手榴弾はしつかり腰につけ」ていたことを、書き込んでいる。このように入念に書き込まれることから、「私」は、

米兵を射たなかつたことで「僚友の負担を増した」と気づいた当時に考えた「私も永く生きてはゐないであらう」という「口実」を自殺によって実現させるはずであった事実、拘泥しているのだと考えられる。つまり、「私」の死への意思の入念な記述は、既に生還した語り手の「私」自身の僚友に対するうしろめたさを表しているのである。

さて、「私」は、遂に水を諦めて死のうとしたが「自殺し損つた」ことについて、「詳しくは語らないつもり」と断る。その上で「私」は、「私」が「まるでいやいや自殺を図る人の様に振舞つた」ことを、「人の様に」と直接表現を避け、その生への執着の語りづらさを示唆しながら、なお語るのである。しかも、手榴弾を発火させる別の方法に想到しなかつた事情について、「或る自殺の手段が流行し得る所以である」という記述の後に、注意すべき改稿が見られる。まず、初出では「彼は直ちにこれに替るべき手段を考案する力を残してゐない」などと書かれていた部分が、初版より「私はそれに最初のひと打ちに私の意志のエネルギーの大半を費消してゐた」など「私」を主語とする文章に改められている。さらに、初出で「自殺者の習性に従つたものと思はれる」と書かれた部分も、初版より「狼狽と虚脱の結果であつたと思はれる」と改められた。このことから、大岡は、初版の「俘虜記」より、「私」個人の責任において「私」の意思のうしろめた

いありようを語る意向を強化したといえる。

そして「私」は、「自殺し損つた」後、米兵に捕えられた。

「私」は、収容所で米兵から「降服したのか、捉つたのか」と訊かれた時には「捉つた」と答え、「米軍が俘虜を殺すという」軍部の宣伝を信じるほど馬鹿ではない」が「敵の前に屈するのは、私の個人的プライドが許さない」と話したという。しかし「私」は、「よく考へて見れば」「進んで抵抗を放棄したのであるから、やはり「降服」してゐた」と続ける。「私のプライド」の問題がきわめて重要であつた」ため「降服」だということは「よく考へてみれば」と、「私」を冷静に説得させるフレイズののちにしか出現させ得なかつたことは、花崎育代氏が既に指摘している。その上で「私」は、抵抗を放棄したことを、「進んで」と、あえて鮮明にしている。

したがつて、「私」の語り方について以下のことがいえる。まず、「自殺する筈であつた」事実への拘泥など生への意思の語りづらさの表出が、僚友への想いと「個人的プライド」によつて、生きて捕えられたことに自責を感じる「私」の姿を示している。その上で「私」は、「私」の意思のうしろめたいありようをあえて追究する。ここに、自分が捕えられた経緯について「私」を通して個人的責任を負おうとする、大岡の意向が読み取れるのである。

## 第二章 「サンホセ野戦病院」―「私」の生還を認める表現方法―

さて、「私」は、自身が遂に生き残つたことをどのように是認しようとしているだろうか。

「私」は、野戦病院に向かう船上で「戦ひつゝある」僚友を想えば「敵中に生を貪るのは、いかにも奇怪な、あるまじきことと思はれた」と語り、左のように続ける。

私はふとこのまゝ、海に飛び込んで死にたい衝動に駆られた。しかしこれは偽りの衝動であつた。「中略」私の存在の真実に根拠を持たない贋の衝動であつた。「中略」衝動は過ぎ、ただ深い悲しみを残した。私はさうした偽りの衝動を感じなければならぬ自分を憐んだ。

右の「偽りの衝動」の記述は、先行研究で大岡の「自己省察の厳しさの代表にあげられている」。しかし、大岡は、単に「私」の僚友への想いを否定したわけではなく、僚友の死が「私」の間としての生への意思を認め難くさせていたことを明らかにし、むしろ「私」の「深い悲しみ」の実態を表記し得たのである。このようにして大岡は、「私」の生を称揚はしない形で是認すると同時に、実態に迫つた反戦を記すための基礎を固めていった。

### 第三章 「レイテの雨」―捕えられた経緯について（「精密に」語ることを把握する）

亀井秀雄氏は、大岡にとって、自分の「経験を伝える方法の厳密化」と、収容所での同胞俘虜の語りの「批評的な訊き取り」とが、「二対の、同時的な行為だった」、と論じている。<sup>⑧</sup> 亀井氏の指摘は重要であるが、「レイテの雨」を読むと、「私」―そして大岡は、書くことによって、俘虜の同僚の語り方を注視し把握していたとわかるのである。

ところで、本篇で、「私」は、俘虜の同僚が「特攻精神の如く教へられたものではない」「真実の感情」としての「恥」を持っていたことを「尊敬」と述べ、「俘虜」の「人権」擁護を唱える「赤十字の精神」には「原因を除かずして結果を改めるといふ矛盾」があると語る。「人権」を尊重するならば、なぜ戦争が実行され、人が囚われるという事態が肯定されるのか。花崎氏は、『俘虜記』において「人間としての現実を凝視する一視点の「恥」の提出」が「よく戦った人々への鎮魂や反戦の源泉」となったことを、指摘している。<sup>⑨</sup>

既述した「私」による「恥」についての自覚の意義をふまえ、「私」が志向する〈精密〉な語りの意味、そして〈精密に〉語ることが可能にするものとは何かを考究していきたい。

最初「私」は、病院に着いて間もなく第八師団の伍長と「互ひ

に兵歴を語り合」ったことについては「平凡な会話」と書き、その語り方の詳細に対する関心の低さを示していた。

しかし、「私」は、「全滅したものと想像してゐた」僚友の一人・北多摩の兵士との再会を想起した時から、回想される僚友の態度に「命が助かった」喜びを見出して書き込み、「彼」らがそもそもいかにして俘虜となったのかについて関心を持つて記していく。

例として、大阪人の衛生兵の場合を考えたい。まず、「彼」の語り方を見る前に、初出では「彼は山で我々の部隊にまぎれ込んだ漂着部隊の衛生兵」と紹介されていたところが、初版から「彼はサンホセ駐屯中ゲリラに襲撃されて戦死した衛生兵の補充に来た衛生兵」と改稿された点を押さえておく。実は、「戦死した衛生兵」とは「西矢隊始末記」で特記される小林衛生兵（第四章で詳述する）を指している。このことから、大岡は、「西矢隊始末記」を書くことで、戦死者のありようと対比する形で俘虜たちの〈あるまじき〉ありようを一層意識して書いたと推察される。それでは、大阪人の「彼」の語りを検討してみる。

最後につかまる時かて、あいつ〔分隊長〕が下痢で動けんさかいつかまつたんや。あいつ手榴弾持つてた癖に出しやがらへん。（もつともかういふ時彼の顔はちよつと微妙な表情を浮べた。善かれ悪しかれこの時わが分隊長が手榴弾を投げなかつたため、今彼の命が無事なのは明らかである）

このように大岡は、「私」に同胞が「命が無事なの」を喜んで  
いた様子をさせ、あまり抵抗せずに俘虜となっていたであろう  
自己の責任についてとりつくり、〈虚栄心の制約〉がある語  
り、相対的に受容できない語りとして把握し提示し始めたのであ  
った。

そして大岡は、「私」に、「貴重な詳細」を語ってくれた気象隊  
の兵士について想起させ特記させていく。「私」が「彼」のよう  
に〈精密に〉語ることを志向した意義とは何か。

気象隊の「彼」は、撃たれて比島人の小屋に運ばれた時、「死  
なねばならぬと思ひ」「胸の傷を悪くするために」「大きく息をす  
ることにした」という。この話の後、「私」は、「(しかしこの時  
の彼の呼吸は彼が故意にしくとも大きくならざるを得なかつた  
らうと私は思ふ)」と書く。ここで「私」は、「彼」が俘虜となつ  
た「恥」を意識して自分をはじめは死のうとした事実を「私」に  
語るつもりでいたのを、認識していると考えられる。また「私」  
は、「と私は思ふ」と、あくまで「私」の解釈であることを断り、  
「彼」の話を尊重している。そして、山中で「実は母のことばか  
り」考えていたという「彼」は、比島人から父母のために生きる  
よう諭されて「なるやうになるほかはないと諦めた」ことを  
「私」に話したという。ここで「私」は、自らの意見を何も書き  
添えずに「彼」の話を受容する。つまり、「私」が志向した〈精  
密〉な語りとは、俘虜になることは〈あるまじきこと〉であると  
自覚しながら、自分の根源に生への意思がはたらいっていた事実を

とりつくりわなない語りであるとわかる。

さらに「私」は、気象隊の「彼」が亡くなったことを分隊長に  
報告した時「涙が眼から溢れて来た」と語る。論者が読む限り、  
〈俘虜記〉で「私」が僚友の死に「涙」を流したと書かれるの  
は、「レイテの雨」のみである。「感傷」に浸ることを慎重に避け  
る大岡が、「彼」の死に對して「私」の「涙」を表記したことに  
は、どのような意味があるだろうか。まず、「私」は〈精密に〉  
語り得た「彼」に對しては個人的に格別の「感銘」を受けてい  
た、という点が指摘できよう。また、「漸く私の心を満たし始め  
てゐた人間」が「再び私から奪ひ去られた」という表現から、語  
り手の「私」の意識は生きて母に会いたかつたはずの僚友を喪失  
して間もない頃の「私」の意識に同期していると推察される。つ  
まり、「私」——また大岡は、自分の生への意思をとりつくりわな  
に語る〈精密〉な語りを志向したことで、本来生きたかつたはず  
の、よく戦つた兵士や戦死した僚友への鎮魂の感情を、想い示し  
得たのである。

#### 第四章 「西矢隊始末記」——大岡と遺族と死者と——

「西矢隊始末記」は、西矢隊の編成から部隊行動の最後までが  
漢字カタカナ表記で語られる作品である。<sup>10)</sup> これまで本篇は、堀井  
正子氏が「客観的語りに限定することで記録的印象を与えてい  
る」と述べたように、主にその文体について論じられてきた。<sup>11)</sup> し

かし論者は、本篇について、堀井氏のいうような「内面的心理には一切立ち入らず」に語る作品と見るのは正確であるかと問いつつ、その内容に焦点を当てて考察したい。

はじめに、「西矢隊始末記」が、大岡が僚友の遺族に宛てた文書「齊藤君の思ひ出」（昭和二十二年五月）や「真藤君の思ひ出」（昭和二十二年十一月）から、分化・成立した過程について確認しておく。大岡から「真藤君の思ひ出」の下書きを借り受けた石崎由三郎は「西矢隊始末記」などのメモとなつたものであろう<sup>13</sup>と述べ、両文の部隊行動に関する記述が酷似している事実に着及している。一方、相違点もある。例として比島の自然に関する描写を見たい。「真藤君の思ひ出」（また「齊藤君の思ひ出」）には、「かうした自然の美しさは〔中略〕我々の心を慰め、氣持を鎮めた様である」といった大岡の解釈といえるものが、「あまりにも個人的で」死者と「何の關係もないと思はれるかも知れない」という断りとともに、書かれている。しかし「西矢隊始末記」では、当該の「個人的」解釈は削除された。このことから、「西矢隊始末記」では、遺族への配慮として、語り手の個人的解釈を控えることで誤解を生じさせる可能性を極力排除し、記述の対象が尊重されているといえる。

これまで確認したことをふまえ、しかし重要なのは、どのような事実が選択されているのかである。それを考えるための端的な例として、小林衛生兵の戦死が特記されている点を考えたい。「齊藤君の思ひ出」（また「真藤君の思ひ出」）には、「サンホセカ

ミナウエ間でガソリンカーがゲリラに襲われ、衛生兵一名が戦死した」と一行だけ書かれていた。ところが「西矢隊始末記」では、「小林トイフ」名前の衛生兵が、「俺ハ駄目ダ。コレカラ天皇陛下万歳ライフカラ、ソコデ聞イテキテクレ」トイヒ、三回唱ヘテ息絶エタ」ことまで記された。つまり、大岡は小林の戦死のありようを重要な事実として選び直したのである。小林の最期は「襲撃」（『新小説』、昭和二十五年五月）でさらに詳述され、「天皇陛下万歳」は「御真影教育の結果であらう」が「小林衛生兵の中で政治の欺瞞が真実となつた」のは「この若者は別に孝行とか勤勉とかいう道德律があつたからだ、と書かれる。大岡は、彼に犠牲を強いた「政治」を「欺瞞」として批判するばかりでなく、「小林」という「この若者」が彼個人の素質に基づいて最期の務めを果たそうとした事実を、重く受け止めていたのである。

また、小林の傍で「応射シタ」兵が「憤懣ヤル方ナク、線路上ニ踊リ上ツテ怒鳴ツタ」という記述も、先述した小林の最期と同様、合本以後（事実上の）定稿まで存続している。

したがって、「西矢隊始末記」は、僚友たちの、行動と、最期を見届けてほしいという思いや「憤懣」などの内面の事実を語った作品なのである。そして、そのような戦死者の軌跡を、語り手の個人的解釈を控える形で、よく戦った僚友の姿を特筆しつつ、記していくという行為そのものが、戦死者個々人や遺族に対する大岡の敬意と配慮を示しているのである。

## 結論

本稿では、初版『俘虜記』が提示した、へいかにして自分が捕へられたか」を〈精密に〉語ることの意義を考究してきた。この〈精密〉な語りには、戦場で自分が死ぬつもりでいた事実への拘泥が見られる。そのような、生への意思についての語りづらさの表出は、語り手が俘虜となったことを〈あるまじきこと〉であると自覚している証である。しかし大岡は、「私」に、書くことによつて気づいた点を活かしつつ、自分自身の根源に生への意思がはたらいっていた事実を明らかにさせようとした。このように〈精密に〉語ることを志向した結果、大岡は、「私」個人の生を称揚はしないで承認すると同時に、本来は生きたいけれどもよく戦った兵士や死んだ僚友がいるという事実を想い、より矛盾なく反戦・鎮魂の意を表し得た。

また、「西矢隊始末記」は、遺族の想いに配慮して僚友の行動と内面の軌跡を書く度に、俘虜となった者のありようを一層自覚して〈精密に〉語る、大岡の営みの支点となった。

大岡は、最初に「私」がへいかにして自分が捕へられたか」を〈精密に〉語る初版『俘虜記』を成立させたことで、以後の〈俘虜記〉において、「嘘」や「捏造」によつて事の本質を見えなくするという問題を、説得力を持って「諷刺」することができたはずである。

## 注

- (1) 「西矢隊始末記」のみ、その改稿が事実調査の進行に伴う訂正であったことから、昭和四十四年の『ミンドロ島ふたたび』（中央公論社）以後の本文が事実上の定稿となった。
- (2) 「生きている俘虜」というのを書く頃から、「占領下の社会の諷刺」という意図が出てくるんです」（大岡『戦争』〔大光社、昭和四十五年〕、復刊九藝出版、昭和五十三年十月）
- (3) 本稿では、テキスト以外の大岡昇平の著作の引用は、断りがない限り筑摩書房版『大岡昇平全集』1～23（平成六年十月～十五年八月）による。旧字は新字に改め引用した。また（ ）内には論者の注を記した。引用文中の改行は／で示す。傍線は論者による。
- (4) 野上元『戦争体験の社会学——兵士——という文体』（弘文堂、平成十八年二月）
- (5) 堀井正子「作品の小説性と記録性について——『俘虜記』の場合——」（『国文学 言語と文芸』九五号、大塚国語国文学会、昭和五十九年六月）
- (6) 花崎育代「大岡昇平手稿『俘虜記』の考察——僚友・私の「プライド」・俘虜の「恥」——」（『論究日本文学』第九六号、立命館大学日本文学会、平成二十四年五月）
- (7) 高田知波『『俘虜記』と「ながい旅」をつなぐもの——大岡昇平ノート——』（『日本文学』第三四卷第一号、日本文学協

会、昭和六十年一月）

(8) 亀井秀雄『個我の集合性―大岡昇平論』（講談社、昭和五十二年五月）

(9) 花崎育代『大岡昇平研究』（双文社出版、平成十五年十月）

(10) 本篇の初出（昭和二十三年十二月一日）は初版（同年同月二十日）と発表時期が非常に近い。また、初出は漢字ひらがな表記であった他、内容に大きく関わる異同はない。以上をふまえ、論者は、初版を軸にその生成過程を視野に入れて考究するので、了承を願う。

(11) 堀井氏の論は同注（5）。なお、尹慶一「生還者のエクリチュール 大岡昇平「西矢隊始末記」と『サンホセの聖母』の文体分析」（『言語態』第一〇号、言語態研究会、平成二十二年八月）は、文体を重視しつつも、「西矢隊始末記」が「部隊の組織と部隊行動、壊滅の始末をクロノロジカルに書く」「自己完結的な」作品であることを指摘している。

(12) 大岡が遺族に文書を送付した時期については『大岡昇平全集23』の吉田熙生・大岡昇平全集編集部「伝記年譜」参照、文書の本文は『大岡昇平全集2』を参照した。

(13) 石崎由三郎『一朗記 南溟に果てしわが子の記録』（春歩堂、昭和二十八年四月）

（たにがわ・なおみ 二〇一五年度本学卒業生）